農 業 技 術 情 報

令和2年6月16日
ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
ＪＡ幕別町	0155- 54-4118
ＪＡ札内	56-2131
ＪＡ帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

各作物の生育・作業の遅速（幕別町６月１５日）
（）内は平年値（※春まき小麦は過去３カ年（春よ恋）・直播てん菜は過去５カ年の平均値）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	±０	草丈 82.2(74.6)cm 茎数 617(722)本/㎡	出穂始 6/ 4(6/ 4) 出穂期 6/ 6(6/ 6) 出穂揃 6/ 8(6/ 8)
春まき小麦（はるきらり）		草丈 65.0(61.4)cm 茎数 648 (818)本/㎡	出穂始 6/11(6/17) 出穂期 6/13(6/20) 出穂揃 6/15(6/21)
馬鈴しょ	早２	茎長 23.1(19.2)cm　茎数 3.6(3.7)本	着蕾期 6/12(6/14)
大　豆	早５	茎長 11.3(7.6)cm　葉数 1.8(0.7)枚	出芽期 5/29(5/31)
小　豆	早３	茎長 4.7(3.2)cm　葉数 0.8(0.2)枚	出芽始 6/ 1(6/ 1) 出芽期 6/ 4(6/ 4)
菜豆（金時）	早３	茎長 9.6(5.1)cm　葉数 0.9(0.2)枚 は種期 5/30(6/ 2)　は種終 6/1(6/6)	出芽始 6/ 6(6/ 8) 出芽期 6/ 8(6/11)
てん菜（移植）	早２	草丈 29.7(29.4)cm　葉数 15.8(14.5)枚	
てん菜（直播）	早３	草丈 15.1(14.0)cm　葉数 11.0(8.3)枚	
牧　草	早１	草丈 88.4(99.0)cm １番収穫始 6/10(6/12)	出穂始 6/ 7(6/8) 出穂期 6/13(6/14)
飼料用とうもろこし	早１	草丈 34.2(32.2)cm　葉数 7.0(6.7)枚	
ながいも(マルチ)	±０	植付終 5/25(5/30)	萌芽期 6/8 (6/8)
たまねぎ	遅１	草丈 32.7 cm(36.1)cm 生葉数 5.5(5.7)枚　葉鞘径 9.6(9.7)mm	

畑　作

＜ 麦 類 ＞

「きたほなみ」の生育は5月下旬以降の高温により回復し、平年並みに出穂しました。「はるきらり」は5月中の少雨の影響を受け茎数が少なく推移しています。
開花期間の天候に注意し、引き続き計画的な防除を実施しましょう。

１ 赤かび病の防除

秋まき小麦でほ場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除を実施した場合は、生育が遅い部分や、既に使用した薬剤の使用回数等を考慮し、2回目以降の防除を実施してください。

春まき小麦(はるきらり)の出穂揃は作況ほ場で 6/15 頃となっており、前年ほどではありませんが、高温続きのため早まる傾向にあります。出穂揃が1回目の防除時期となって

いますので、表１を参考に適切な防除に努めてください。

表１　赤かび病の防除薬剤例

防除時期			農薬名	系統名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）
春小麦	1回目	出穂揃	バラライカ水和剤	ﾌﾀﾙｲﾐﾄﾞ DMI	500	収穫 14 日前	2回
春小麦 秋小麦	2回目	1回目の7日後	ベフトップジン フロアブル	ﾋﾞｽｸﾞｱﾆｼﾞﾝ ﾍﾞﾝｿﾞｲﾐﾀﾞｿﾞｰﾙ	800～1,000	収穫 14 日前	1回（出穂後）
	3回目	2回目の7～10 日後	シルバキュア フロアブル	DMI	2,000	収穫7日前	2回
	臨　機	登熟期間	チルト乳剤 25	DMI	1,000～2,000	収穫3日前	3回（春季以降）

※DMI剤は、周辺作物に薬害が生じる可能性があるので飛散に注意する。

※DMI剤の連用は極力避け、使用回数も最小限とします。

2 アブラムシ類の防除

ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

【 要防除水準 】

ア ブ ラ ム シ:ほ場のおよそ半分以上の穂で寄生が観察された場合に防除する。（薬剤は 6/1 付技術情報参照）。

3 葉面散布による窒素追肥について

適正タンパク値の確保や粒重の増加を目的として窒素の葉面散布を行う場合、*「尿素使用の場合は 1.0～1.5%液を3回（窒素成分で1回 0.5～0.7kg／10a）」*で検討してください。

4 小麦「なまぐさ黒穂病」への注意

十勝では発生が確認されていませんが、注意が必要です。「なまぐさ黒穂病」に汚染された収穫物が乾燥貯蔵施設に混入した場合、施設全体が汚染されることとなり出荷不能になるなど、大きな被害をもたらします。感染している場合、乳熟期までには外観から症状が確認できるようになりますので、下記を参考に、万が一疑わしい株を発見したら、JAあるいは普及センターにお知らせください。

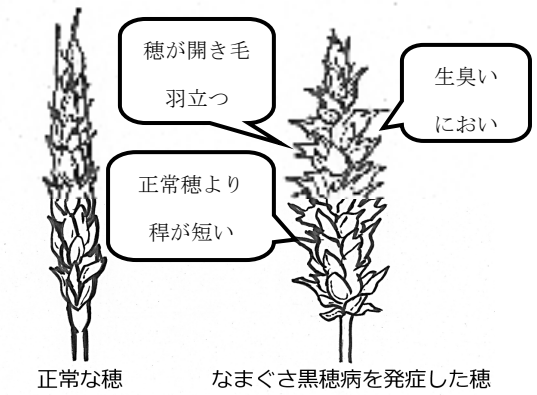

図１　なまぐさ黒穂病の特徴

＜ てんさい ＞

中耕により地温上昇を図るとともに、畦間が茎葉で覆われる前までにほ場や降雨の状況を踏まえ、最終の中耕を終えましょう。中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

1 根腐病の防除≪6 月中旬～7 月上旬までを目途に≫

「連作・短期輪作ほ場」及び「前回作付時に根腐病が多発したほ場」、「排水性の劣るほ場」では、必ず防除を実施してください。上記の条件で、曇天によりほ場の湿潤状態が

続く場合は、2回目の根腐病防除を検討しましょう。

表2 根腐病の防除薬剤例

農薬名	系統名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）	薬剤特性
モンセレン顆粒水和剤	フェニルウレア	1,000	収穫 30 日前	4回	予防
リンバー顆粒水和剤	SDHI	4,000	収穫7日前	3回	浸透・予防・治療
アミスター20 フロアブル	QoI	1,500	収穫 14 日前	3回	浸透・予防・治療

※根腐病防除は散布水量 10a 当 200l の株元散布とします。

2 アブラムシ類・ヨトウガの防除

アブラムシの発生及びヨトウガの産卵を確認しています。今回の防除は、ヨトウガとの同時防除で行うため、下記薬剤で実施をお願いします。期間は日甜ハガキを参照してください。

表3 アブラムシ・ヨトウガの防除薬剤例

農薬名	系統名	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
リーズン顆粒水和剤	ネオニコチノイド+IGR	3,000	収穫 14 日前	2 回

※リーズン顆粒水和剤はアクタラとマッチの混用剤です。マッチは殺卵効果がありますが、老齢虫には効果が低いので遅れずに防除してください。

3 中耕

ア 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」・「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、初期生育の促進に努めましょう。

イ 中耕作業の深さと広さは根の広がりを確認し、生育初期には浅めに調整し、次第に狭く深くして畦間が茎葉で覆われる時期（草丈 35cm まで）までに実施しましょう。

ウ 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

4 除草剤散布

ア 除草剤のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、実施しましょう。

イ 直播てん菜は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。

※日甜ハガキ情報や「農作物病害虫防除基準・除草剤使用基準」を参照して適切な防除を実施してください。

＜ ばれいしょ ＞

本年は着蕾期が 6/12 （平年 6/14）と平年よりやや早いですが、乾燥気象が続いているため疫病の初発はまだ予測できませんが、今後降雨があるごとに危険期に近づきます。予防的防除を必ず実施しましょう。また、既に感染が疑われる場合は、治療効果のある薬剤を使用してください。

1 疫病の防除

ばれいしょ疫病菌は 10℃を超えると活動が始まり、最適気温 18～20℃の多湿条件で

多発します。特に、冷涼多湿な環境や水たまりのできやすい凹地（排水不良箇所）、トラクタの車輪のぬかるんだところ（防除畦など）、生育が過繁茂気味のほ場や風通しの悪いところ・山あい・防風林の影などでは発生しやすく注意が必要です。ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。

ア　初発前に必ず防除：ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。
イ　初回の防除前に感染が疑われる場合：治療効果のある薬剤を使用。
ウ　作物の生育に応じた薬剤選択：茎葉の生長段階では浸透移行性のある薬剤を使用。
エ　降雨に応じた薬剤選択：ほ場に入れない状況が予想される場合は、Wインターバル（14 日間隔）効果のある薬剤※の使用を検討してください。実施する場合は、初発前から散布してください。
※「リライアブルフロアブル 800 倍」、「プロポーズ顆粒水和剤 750 倍」、「ライメイフロアブル 2,000 倍」、「レーバスフロアブル 1,500 倍」、「ランマンフロアブル 1,000 倍」、「フロンサイドSC1,500 倍」（平成 25 年度指導参考）。

表４　疫病の防除薬剤例

農薬名	系統・分類名 ※1	使用濃度(倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)	浸透移行性の有無	効果の発現
グリーンダイセンM 水和剤	マンゼブ	400～600	7日	10 回	×	予防
リライアブルフロアブル	ｱｼﾙﾋﾟｺﾘﾄﾞ系 ｶｰﾊﾞﾒｰﾄ系	800～1,000	7日	3回	○ ○	予防 治療
ゾーベック エンカンティア	ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ	2,000	14 日	2回	△浸達 ○	予防 治療
フロンサイドSC※2	フルアジナム	1,000～ 2,000	7日	4回	×	予防

※1　薬剤名が異なっても、成分（分類）が同じ場合は連用を避ける。各薬剤成分を考慮したうえ、総使用回数を遵守し、ローテーション防除を心がける。
※2　「フロンサイドSC」は 1,000 倍で菌核病、2,000 倍で夏疫病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

２　軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿条件で多発しますが、本格的な軟腐病防除は、開花期以降（7月上中旬）となります。そのため、早い時期の疫病防除に併せて実施する必要はありません。ただし、強風や培土作業等で茎葉が傷ついた場合は、傷口からの感染を防ぐため防除を実施しましょう。初期防除の徹底に心がけ、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表５ 軟腐病の防除薬剤例

農薬名	系統・分類名	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）	効果の発現
スターナ水和剤	ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸※	1,000	７日	５回	予防治療
バクテサイド水和剤	ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ・ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ・銅	750～1,000	７日	５回	予防治療
マテリーナ水和剤	ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸※	1,000	７日	３回	予防治療
ｶｽﾐﾝﾎﾞﾙﾄﾞｰ カッパーシン水和剤	銅 ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	500～800	７日	３回	予防治療
バイオキーパー水和剤	生物農薬	1,000	発病前～発病初期	―	予防

※オキソリニック酸に対する低感受性菌が出現している地域があるので、連用は避ける。
※オキソリニック酸を含む剤の使用は合計５回まで。

３ アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除

本年はアブラムシの発生期が「早」、発生量は「多」と予想されています（北海道病害虫防除所「６月予報」）。林地や防風林近くの多発に注意し、ほ場をよく観察し、害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

表６ アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除薬剤例

農薬名	系統名	対象害虫			使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
		アブラムシ類※	ｵｵﾆｼﾞｭｳﾔﾎｼﾃﾝﾄｳ	ナストビハムシ			
モスピラン SL液剤	ネオニコチノイド	◎(ﾜﾀ)	◎	◎	4,000	７日	３回
アドマイヤー 顆粒水和剤	ネオニコチノイド	◎ (ｼﾞｬｶﾞ/ﾓﾓ/ﾜﾀ)	◎		5,000～15,000	14日	２回
アクタラ顆粒水溶剤	ネオニコチノイド	◎3,000倍 (ｼﾞｬｶﾞ/ﾜﾀ)	○	◎ 2,000倍	左記参照	14日	３回
ベジホン乳剤	ピレスロイド 有機リン	◎ (ｼﾞｬｶﾞ1,000/ ﾜﾀ2,000倍)		◎ 1,000倍	左記参照	30日	２回
ペイオフME液剤	ピレスロイド	◎ (ｼﾞｬｶﾞ2,000/ ﾜﾀ1,000倍)	◎	○	2,000	７日	４回
ゲットアウト WDG	ピレスロイド	◎ (ｼﾞｬｶﾞ/ﾓﾓ)		◎	2,000～3,000	７日	４回
マブリックEW	ピレスロイド	◎(ｼﾞｬｶﾞ)			4,000	７日	２回
モベント フロアブル	テトロン酸	◎(ﾜﾀ)			4,000	７日	３回
ウララDF	同翅目摂食阻害剤	◎ (ｼﾞｬｶﾞ/ﾓﾓ/ﾜﾀ)			4,000	７日	２回
コルト顆粒水和剤	その他	◎ (ｼﾞｬｶﾞ/ﾓﾓ/ﾜﾀ)			4,000	前日	３回

※ｼﾞｬｶﾞ:ジャガイモヒゲナガアブラムシ、ﾓﾓ:モモアカアブラムシ、ﾜﾀ:ワタアブラムシ
※◎は登録があり、道ガイドに掲載されているもの、○は登録があるもの（以下、同じ）
※モベントフロアブルは銅ストマイ水和剤とは混用しない（ストレーナに付着物が生じる）。また、ストレプトマイシン含有殺菌剤との混用の場合は、モベントフロアブルを先に希釈する。

＜豆 類＞

6月 15 日現在の生育は平年よりやや早く進んでいます。中耕の実施により除草および生育を促進しましょう。

1 中耕

初期生育を確保するために、除草剤の残効を考慮しながら、暖かい日に中耕を実施し地温の上昇を図りましょう。また、遅い中耕や培土は、断根による養分吸収阻害の程度が大きくなるので、開花始 10 日前まで(7 月上中旬頃)には最終の培土を終えましょう。

2 大豆「わい化病」・金時「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)の防除

病害虫発生予察情報によると、ジャガイモヒゲナガアブラムシの発生期は「早」・発生量は「多」と、飛来時期は早い予測となっており、幕別町ではまだ飛来が確認されていません。※5/18 号を参照し防除を実施して下さい。

3 小豆「茎疫病」の防除

連作ほ場や排水の劣る場所で発生することがあります。発病後の茎葉散布では効果が得られないため、発生が予想されるほ場は、予防防除や溝切りによる排水を実施してください。

表7 小豆「茎疫病」の防除薬剤例

農薬名	系統・分類名	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
フェスティバルC水和剤	CAA 無機化合物	600	7日	3回
ランマンフロアブル	Qil	1,000	7日	3回
レーバスフロアブル	CAA	2,000	7日	3回
リドミルゴールドMZ	ジチオカーバメート フェニルアミド	500	30 日	3回

4 小豆のアブラムシ類の防除

マメアブラムシは局所的に多発生するので、ほ場をよく観察し生長点近くに寄生を確認したら早急に防除してください。

表8 小豆のアブラムシの防除薬剤例

農薬名	系統名	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
モスピランSL液剤	ネオニコチノイド	2,000～4,000	14 日	3回
ゲットアウトWDG	ピレスロイド	3,000	7日	3回
ペイオフME液剤	ピレスロイド	2,000	7日	3回

5 菜豆(金時)「かさ枯病」の防除

かさ枯病にり病すると本葉に赤褐色の斑点が生じ、周辺部が黄色くなり葉脈はすじ状に赤褐色を呈し激しい場合は株が黄変し枯死します。本病は低温多湿で発生しやすく、機械管理作業の接触でまん延します。発生が予想される場合は 6/1 号を参照し防除して下さい。

６　菜豆の「根腐病」発生時の対策

発芽後数週間で感染が起こり、６月中～下旬に降雨と高温が続くことで発病が激しくなります。発病株を発見したら、健全部の新根の発生を促すため、早期に培土しましょう。

野　菜

高温少雨の気象条件が続いたためアザミウマ類やチョウ目等、害虫の発生が多く見られます。防除を実施してください。

＜レタス＞

(1)ナモグリバエの防除※

ナモグリバエは平均気温が15～20℃になる６月中～下旬から成虫の発生が多くなるため、注意が必要です。

(2)腐敗病の防除※

高温多湿条件で発生が助長されます。今後に備えて、予防防除を実施してください。

※薬剤については、「６月１日技術情報もしくは令和２度農作物病害虫防除基準」を参照。

(3)菌核病・すそ枯病・べと病の防除

菌核病、すそ枯病、べと病は低温多湿条件により発生が助長されます。必要に応じて予防防除を実施してください。

表１　レタス菌核病・すそ枯病・べと病の防除薬剤例

病害名	薬剤名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）
菌核病	ゲッター水和剤	1,500	収穫7日前	２回
すそ枯病 べと病	アミスター20フロアブル	2,000	収穫7日前	４回
	ダコニール1000	1,000	収穫14日前	３回

＜キャベツ、はくさい＞

(1)コナガ・アオムシの防除

コナガの成虫が６月10～14日の５日間で、キャベツほ場で27頭、はくさいほ場で65頭誘殺されています(図1)。また、十勝管内でヨトウガ、モンシロチョウの発生も確認されています。ほ場の状況を確認して必要に応じて防除を行ってください。

※薬剤については、「６月１日技術情報もしくは令和２年度農作物病害虫防除基準」を参照。

<u>コナガは薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統殺虫剤の連用は避けましょう。</u>

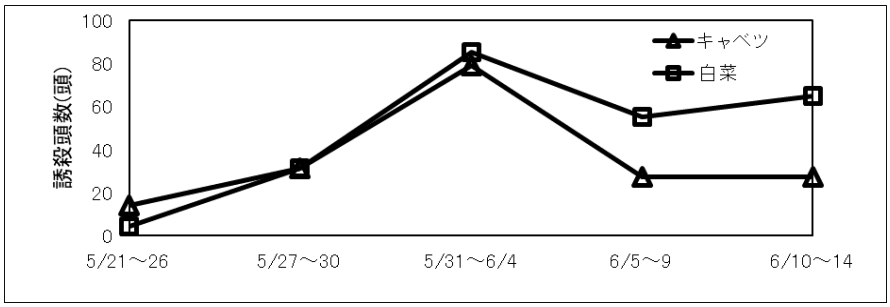

図1　コナガの誘殺頭数推移

＜だいこん＞

（1）亀裂褐変症と軟腐病の予防防除

多湿条件で気温が高くなると、亀裂褐変症や軟腐病の発生しやすい条件となるため、今後注意が必要です。

（2）キスジノミハムシ（ジノミ）の防除

は種後の粒剤施用に加えて、茎葉の防除を徹底してください。

表2 亀裂褐変症の防除薬剤例

防除目安時期	薬剤名	使用濃度（倍）	使用時期	回数(以内)
は種後 20 日目	バシタック水和剤 75	1,000～1,500	収穫 21 日前	3回

表 3 軟腐病の防除薬剤例

防除目安時期	薬剤名	使用濃度(倍）	使用時期	回数	注意事項
は種後 25 日目	Zボルドー	500	ー	ー	クレフノン 200 倍を加用する。

表 4 キスジノミハムシの防除薬剤例

は種後	薬剤名	系統名	使用濃度(倍）	使用時期	回数(以内)	注意事項
20 日目	エルサン乳剤	有機リン	1,000～2,000	収穫 30 日前	2回	・散布時期に注意する。
30 日目	ベネビア OD	ジアミド	2,000	収穫前日	3回	・銅剤の混用、展着剤の加用で薬害を生じる恐れがあるため、注意する。

＜ながいも＞

（1）マルチ栽培での芽やけ対策（スリットからの芽出し）

ほ場の見回りをこまめに行い、マルチのスリット部に芽が引っ掛かっているものは速やかに出して、芽やけ（高温障害）を防ぎましょう。

（2）アブラムシの防除

高温少雨で推移したため発生時期が早くなると予想されています。萌芽後に必要に応じて防除を実施してください。

表5 アブラムシの防除薬剤例

薬剤名	系統名	使用濃度(倍）	使用時期	回数(以内)
オルトラン水和剤	有機リン	1,000	収穫 45 日前	1回
モスピラン顆粒水溶剤	ネオニコチノイド	4,000	収穫7日前	3回
ゲットアウト WDG	ピレスロイド	3,000	収穫前日	3回

＜たまねぎ＞

草丈32.7cm、葉数5.5枚、葉鞘径9.6mmと生育はやや回復気味です。生育の進んでいるほ場では、オニ皮となる8葉目が出てきたため、除草剤処理は避けましょう。

（1）ネギアザミウマの防除

本年はネギアザミウマの発生が早く確認されています。引き続き、ほ場を確認しながら防除を行ってください。

※薬剤については、「6月1日技術情報もしくは令和2年度農作物病害虫防除基準」を参照。

（2）白斑葉枯病の防除

例年、6月下旬から発生が多くなるため注意が必要です。また、小菌核病との同時防除も効果的です（平成30年度指導参考参照）。

表 6　タマネギ小菌核病の薬剤防除対策(平成 30 年指導参考事項より)

項目	対策
薬剤散布適期	６月中～下旬
薬剤散布回数	２回
薬剤散布間隔	10～15 日
白斑葉枯病との同時防除	小菌核病の散布適期に小菌核病と白斑葉枯病の両方に登録のある薬剤を使用すると効率的

表 7　白斑葉枯病の防除例

防除時期	薬剤名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）	注意事項
６月中旬	フロンサイドSC	1,000～2,000	収穫3日前	５回	―
６月下旬	オルフィンフロアブル	2,000	収穫前日	３回	小菌核病の登録あり。
７月上旬	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000～3,000	収穫前日	５回	小菌核病は 2,000～4,000 倍で登録あり。
７月上中旬	アフェットフロアブル	1,000～1,500	収穫前日	４回	小菌核病は 1,500 倍で登録あり。オルフィン・カンタスと同系統のため連用は避ける。

(3)べと病の防除

気温が 20℃以下の高湿度条件で胞子を形成し、感染します。感染時期は6月中～下旬、発病は7月上旬頃です。

感染前の薬剤散布が効果的です。6月中旬頃にマンゼブ剤による予防防除を行いましょう。過去に発生が見られたほ場では必ず実施してください。

表 8　べと病の防除薬剤例

薬剤名	成分名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）	注意事項
グリーンダイセンM水和剤	マンゼブ※	400～600	収穫3日前	5回	・予防防除
リドミルゴールドMZ	マンゼブ※・メタラキシル	1,000	収穫7日前	3回	・発生時のみ使用する。

※マンゼブを含む薬剤の使用回数は、合計で5回以内。

～～農薬の安全使用と農作業安全に努めよう！！～～

□　農薬危害防止活動の実施

★農薬の使用基準や注意事項を確認し遵守しましょう。

★除草剤等の散布でスプレーヤを使用する際には周辺作物への飛散防止に努めましょう。

★農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。

★使用した農薬容器や袋は、適切に処理しましょう。

★農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。

□　春の農作業安全運動強調月間（４～６月）

★機械の調整・整備等の際は、必ずエンジンを止めましょう。

★必ず機械を止めてから乗り降りしましょう(飛び乗り、飛び降りはしない)。

★二人以上で作業する時や危険と思われる作業に入る前には、必ず声を掛け合いましょう。